

・ 数学のサークル、理科のサークルが発展することは大切なことだ。しかし、いろいろな教科の人間が一般と特殊の関係を論じてみることも必要だ。日生連は、理科教協、教協と協力して、教科としての論理を探る過程でどうしても、他教科および全教育課程の課題を関連づけて構造づけるという重大な仕事を

すべきではないか。これらは、うらおもての関係になることから、単一教科の研究運動を教育運動の一環としての研究活動として、サークルを発展させることが必須ではあるまいか。理・教教師は、もって積極的に社会科のこ

ように学習指導要領には「生活に必要な基礎技術を習得し、近代技術に関する理解を与える」ことを目標としている。しかし②で指摘しているように技術科は、「……最近における科学技術の画期的な進展に伴ない、国民全般の科学的、技術的な水準を高め、わが国の産業や国民生活の発展向上を図ることがきわめて重要になりつつある」という認識にもとづいて「新設されたのである。しかも」……この教科は、過去の歩みから解放され新しくかつ幼い、したがって数学や理科にくらべると、きわめて荒削りの教科であり、他教科とは比較できないほど未解決な問題をほらんでいる」というのが実状である。

技術科・芸術諸教科の本質と現状

山 崎 昌 甫

技術科

ここでは、夏の集会以降本誌でとり組んできた技術科の問題を整理し、この教科の本質は一体何なのか？ を検討し、今後の問題を指摘してみた。実際には九月号以来（この小稿を書くまで二月号は発刊されていない）技術科をめぐる論ぜられた主なものは、

- 〈九月号〉①共同研究——生活力と学力の実践的検討「科学技術教育における生活力と学力の問題」……佐藤 興文
- 〈十二月号〉②「技術教育の現状と問題点」……鈴木 寿雄
- ③教室訪問——「木立を作る学習」……

- ④「理科と生産技術科との関連について」……埼玉県美園中学校
- ⑤「技術・数学との結合を」……上村与四郎
- ⑥「十二月臨時増刊——国民教育の今日的課題」……福井 幸雄

他の教科と違ってこの技術科は、昭和二十二年に職業科として発足して以来、数次にわたって性格内容が変ってきている。したがって、今度の職業・家庭科から技術・家庭科への移行にあたって、技術科の目標は何か？ ということが一番問題になっている。周知の

さて、④で、この教科の目標を「人間は、物をつくることによつて、はじめて人間になったのだ」、「従つて『物をつくる』ことを教えることは、教育の根本である。……それ故に、生産技術教育は、最も適切な、かつ最も深い意味において、第一義的な基礎学科である。」ここでは労働を基本要素とする。この「手を動かすこと」のなかに、あたまたの働きを、新鮮、確実、かつ健康に啓発する働きがあり、そして手を動かす以上は、その与えられた時間的な、また物體的なわくの中で、で

きるだけの巧さをえること、すなわち習熟を
もめざさねばならない。……だからその目標
は、……知識、能力、習熟である」とする。

さらに、教科の全体構造の中で技術科を
「技術は科学の応用」でもあれば、また「技
術は科学の土台」でもある。しかし基本的な
関係は、後者である。……技術教育は科学教
育——理科教育の土台である」として理科と
の関連において位置づける。しかし、科学と
技術との関係、理科と技術科との関連の具体
的な問題、つまり内容と方法の問題になっ
てくるとかなり立場の相違がでてくる。

典型的には⑥では、技術科での「技術」の
とらえ方を「適用説」排除の立場から試みて
いる。……といてそこでは「手段体系説」が貫
ぬかれていくわけではない。ここで「技術科
の教育方法については全く未開であるとい
うのが現状である」としているが、このことは
技術科の規定、方法原理として技術論的立場
と無関係ではない。⑥での問題提起は今後積
極的に発展させられなければならない(論争)
問題点である。このばあい、④で指摘して
いるように技術科が「中学校に偏在してお
り、小学校では『工作』として図工科の一部
に寄生し、また一般の高等学校においては全

ら」だ。そして、芸術作品から受ける「感動
は、自分自身の生き方を指し示す感動である
はずだ。感動があるからこそ、人間は本質的
に変革されるのだ」というところに芸術教育
の本質と、存在意義をおさえている。つま
り、芸術教育を「正しい感動を大切にし豊か
な感情を育て、豊かな創造的表現を伸ばすこ
とによって、人間形成、人間変革を行なう教
育」と規定する。ここで「正しい感動」とい
うのは客観的認識にもとづいた質と方向性を
もった感動という意味である。

『歌いたい』という欲求は、本能的な、した
がって人間的に生きていくために欠くことの
できないもの」であり、「絵をかきこは、す
べての人間の本能的衝動で(あり)……激し
い生命力のあらわれなの」だという点が芸術
教育の出発点であって、この本能的欲求や衝
動を何物にも阻害されることなく表現でき
ばあいに、はじめてつぎの高次の芸術的発展
を促す契機としての感動が子どもたちに体得
される。これがあつてこそ教師と子どもとの
話しあいが意味のあるものとして直接子ども
の人間性に働きかけることになり、これを通
して正しい技術——知識への道が開かれ、さ
らに高度な芸術的な感動に導かれる訳である

く存在しない教科」であることがこの教科の
本質を、従って目標を不明確なものにしてい
るといつていい。小、中、高を一貫した技術
教育の系統が考えられるならば、それは⑥で
の生産教育と一般教育とを対立的にとらえる
立場は、本来的に一般教育としての生産教育
として位置づけられなければならない。だろ
う。こういう意味で、①で、「小学校段階で
の科学技術教育、そしてとくにその系列内
の手段具をとともなう仕事を重視したい。義務
教育初期をなせ重視するかは、……幼くて人
間的成長力を比較的阻害されていず、それゆ
え製作意欲の旺盛な時期が、労働の本質へ近
付くためにきわめて肝要である」とし、中学
段階では「真に生産的立場にたつ自然科学の
系統的学習を第一にめざすべきである」とし
「技術教育のための独立の教科の設定に賛成
できない。……自然科学的な能力の不十分な
ままに、しかも独立な教科として、このよう
な実技的な授業が行なわれるときの行方は見
えずにいてる」、そして「自然科学の学習と
同時に、実際の工場の見学をできるだけし
ば行ない、同時に生産(工・農業)の実際
の概説や生産の社会における位置、機能につ
いての学習、それを歴史的にみた生産技術史

ところが、技術主義や道徳的要求、評価や
既成概念が芸術諸教科のセクト主義を生みだ
し、芸術教育の目標を出発点から誤らせ、結
局、子どもはもちろん、教師までこれらの教
科に対する意欲や感動を失わせる結果にして
しまっている。

だが、芸術的表現に対する意欲がもともと
本能的感動や欲求に根ざすものとすれば、正
しい感動を体得させ、より高度な芸術的境地
へとたかめる方途は、むしろ、主題・内容の
選択、教育方法の吟味ということがより重要
な問題なのではなからうか。表現活動は鑑賞
活動を媒介にし、さらに技術や知識を確かな
ものにするることによって、よりすぐれた芸術
教育へと展開していくのであろう。われわれ
の芸術教育が国民教育としておこなわなけれ
ばならないとすれば、もっと大胆に技術や知
識の指導、鑑賞のあり方を問題にしなければ
ならないのではあるまいか。芸術諸教科内部
の構造を密度の高いものにしていかなくては
なるまい。それにはまず、芸術教育担当者相
互が解放的に話し合うことから始めよう。そ
して他教科の教師との積極的な交流を進め、
教師なかに、芸術的感動を盛上げようでは
ないか。

のあらまし」が組みこまれるよう全体カリキ
ュラムの検討を提案している。

この考え方は、④の手段体系論者の論旨と
必ずしも対立していない。つまり、小、中、高
を一貫する科学技術教育のあり方が、内容方
法についての概念拘泥的な立場を克服するも
のであるし、他教科との関連をもっと基本的
な立場から問題にできるのではあるまいか。
芸術諸教科

とくに連盟においては、芸術諸教科は技術
・家庭科と共に不振であり、今まで真正面か
ら問題にされたことが極めて稀だったという
のが現状である。むしろ、こういうところに
連盟が今後芸術教科の本質究明にとりくまな
ければならない理由があるといえよう。ここ
では九月号以降とりあげられた唯一の論文で
ある「国民教育の今日的課題」——芸術教育
はどんな役割を果たすか——だけを問題にす
る。

技術科が「物をつくることによって、はじ
めて人間になったのだ」、だから人間形成に
とって「第一義的な基礎学科である」といっ
ているように、芸術諸教科は「感動を大切に」
にする教育の領域である。「なぜ、人間に感
動が必要なのか、それは、生命の営みだけ

おひなさまの民主化

三年生のできことである。
「ホラ、一番上のトノサマと女の人はい
つもあそこだろ。そして、三人の女の
人が二段め、どうして、そういうふう
にきまつたの？」
「トノサマはえらいだろ、だから一番上
にすわっているんだよ。」
「でも、それはおかしいわ、いけないの
よ。トノサマなんか、いまはいないじ
やないの。」
「そうだよ。先生は、人間はだれもみん
な同じだっていったもん。トノサマば
かりがいつも一番上だっていうのはい
けないよ。」
「そうそう、あのね、毎日かわりばんこ
にすわる場所をかえてあげたらいいわ
よ。そうしたら、みんな同じになるで
しょ……。」
こんな話しあひから、一日交代でおひ
なさまのすわる場所がかえられたとい
うオハナシです。現代子ども気質の一端。